

マッシュ・キリエライトはショタコンである

どらいばー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マシユの中の人関連の一発ネタ。アンチ・ヘイトは保険です。原作の綺麗なマシユ以外受け付けない人はバック推奨。

追記：今までの話も含めて、一話に一人シヨタ鯖紹介を入れることにしました。

目次

だいちわ	マシユ・キリエライトはシヨタコンである	1
だいにわ	カルデアにて	4
だいさんわ	ロンドンにて	7
番外編		
ばんがいへん	男マスターの場合	10

だいいちわ マシユ・キリエライトはシヨタコンである

人類をより長く、より確かに、より強く繁栄させる為の理——人類の航海図。

これを魔術世界では『人理』と呼ぶ。

歴史の改竄によって人理は焼却され、人類は全滅した。唯一人理焼却の影響から逃れた、人理継続保証機関フィニス・カルデア、そこに残ったたった一人のマスター、藤丸立香。これは、彼女と頼れる後輩サーヴァント、マシユ・キリエライト、生き残った僅かなカルデアのスタッフたちの、未来を取り戻す戦い——ではなく、主に少し特殊な嗜好を持った少女たちの断片を綴る話である。

藤丸立香の頼れる後輩、マシユ・キリエライトは、いつも通り藤丸立香を起こしに來ていた。

「先輩、朝ですよ。今日は戦闘訓練をする予定が入っています。早く起きて準備をしましょう。」

「…うーん、あと五分…」

「もう、先輩……あれ？これは…」

立香が寝返りを打ったとき、枕の下から何かはみ出ているのに気づいた。そつと取り出してみると、それは一冊の薄い冊子だった。

『智君の膝枕本』？これは…」

簡素にタイトルのみが書かれたその本を、マシユは開いた。開いてしまった。

—その日、マシユは割りとどうでもいい運命に出会う—

第二特異点、古代ローマの戦場にて、当時の皇帝ネロ・クラウディウス（史実と違って少女）と共にまだ全貌の見えぬ敵と戦う立香とマシユ。彼女たちは、何者かの策によって敵の前に誘い出されてしまっていた。

何者が来ても対応できるように身構えていた彼女たちの前に現れたのは、赤髪をした、幼い見た目ながらも霸王の気質を感じさせる少年と、その横に付き添うように立つ現代のスーツを着た男だった。「やあ、君が当代のローマ皇帝で合ってるかな？僕が君と話がしたくて来てもらったんだ。僕はアレキサンダー。どうして君たちは僕たちと…あれ？なんか君たち、ちよつと僕を見る目がおかしくない？」

ネロ、立香、マシユは、アレキサンダーが出てきたときからプルプルと震えているようにみえる。心なしか敵である筈のアレキサンダーを見る目つきが妖しく、ハアハアと荒い呼吸をしている。彼女たちは、突如として同時に叫んだ。

「なんという美少年だ!!／＼めっちゃくちや（ものすごい）最高のシヨタだ（です）!!」

「え、ちよつ」「ま、待ちたまえ！」

いうが早い、三人は物凄い勢いで一斉にアレキサンダーに近づいた。傍に居た男はその際三人の突進によって吹き飛ばされた。

「え、お姉さんたち、ちよつと、お、落ち着いてよ！」

「先輩、お姉さん呼びです！」「うっはあ、やばい、鼻血出る！半ズボンから出てるお膝がやばい！」「やはり、近くで見るといつそう美しいではないか！余の元に来るがいい！」

女三人にもみくちゃにされる美少年。完全に事案であつた。それをモニター越しに見ていたカルデアスタッフたちは、この人理修復に凄まじい不安を覚えた。

そして、一部の女職員たちは少女たちを羨ましく思つてひっそりと血の涙を流した。

だいにわ カルデアにて

第二特異点を修復した立香たちは、新たな戦力の補充のために英霊召喚を行おうとしていた。

ロマニとしては、できれば前衛としてセイバークラス、もしくは移動手段としてライダークラスのサーヴァント、あるいは搦め手に対応でき回復も可能なキャスターなどが欲しいところだったが、この際何が来ても万々歳であった。

ローマでは相手の数に対応できる手がありなく、苦戦を強いられた。これまで何度か召喚は行っていたものの、サーヴァントはなぜか来ず、礼装ばかりが溜まっていた。なお、立香は召喚が終わるたびにシヨックで部屋に引きこもっていた。

しかし今回、立香もマッシュも、スタッフたちもサーヴァントが引けると確信していた。なにせ、ローマにて出会ったライダーのサーヴァント、アレキサンダーのマントという強力な触媒を手に入れていたからだ。あの後いろいろあつて戦ったアレキサンダーからマントを拝借していたのだった。仮にアレキサンダーが呼ばれずとも、彼に縁のある何らかのサーヴァントが呼ばれるであろうと思っていた。

「…半ズボン…シヨタ…紅顔の美少年…」

「先輩…頑張つて下さい！先輩なら引けます！理想のシヨタを！」

「うおおおおおおおおオオオオオオ！来い！最高のシヨタサーヴァントおおオオオ！」

欲望にまみれた叫びと共に、アレキサンダーのマントが中心に置かれた召喚サークルに特異点にて集めた魔力の結晶、聖晶石が投げ込まれる。

「こ、これは！セイントグラフ！サーヴァントです先輩！クラスは…キャスター？」

金色のセイントグラフが立香たちの手元に現れ、そこに描かれていたのは杖を持った老人の絵。キャスターのサーヴァントが召喚された証であった。

召喚サークルの光が収まったとき、そこにいたのはアレキサンダーのマントを羽織った、中性的な少年だった。

「…全く…なんたつてこのときのボクが呼ばれるんだよ。まあ、呼ばれたものは仕方ないか。」

ボクはキャスター、諸葛孔明。ボクが仕える主はもう一人に決まってるから、まあ同僚くらいにっとうわあ!」

「うわっはあ! やった! ショタサーヴァント! ショタサーヴァントが来たよ! 初めまして! 私は藤丸立香! よろしく!」

「やりましたね先輩! あ、私は先輩のデミ・サーヴァント、マシユ・キリエライトです! よろしくお願いします!」

その姿を認めた瞬間に、立香とマシユは孔明目掛けて走り出し、勢いよく孔明に近づいて力強く握手を求めた。立香もマシユも興奮が抑えきれず、頬が紅潮している。

「なにこれ、え、何なんだよ!」うわあ、髪の毛サラサラだあ!」「え、本当ですか! うわ、凄いです!」ちよつと! 頭撫でるなって! ちよつと! その人たち助けてよ! っておい! そんな強く生きろよみたいな目で見るなよ! おーい!」

ちなみに、十回分まとめて行った召喚はまだ続いていて、ひっそりとライダーのメデューサ、ランサーのクーフーリンが召喚されていたが、立香とマシユは孔明に夢中で気づいていなかった。メデューサも何やら、もみくちやにされる孔明をガン見していたことに記しておく。クーフーリンは見て見ぬふりをして、足早にカルデア内を案内してもらいに部屋を出ていた。

なぜかまだ少年であった頃の姿で呼ばれてしまった、孔明の霊基を得たウェイバー・ベルベット。彼の受難は、まだまだ始まったばかり

だ
っ
た。
。

だいさんわ ロンドンにて

新たに三体のサーヴァントを戦力に加え、第三特異点をなんとか乗り越えたカルデア。シヨタが出たわけでもないので詳細は省くが、ヘラクレスは強敵でしたね…。

クーフリーンが頑張ってくれた気がしたが、あいにくとカルデア女子は孔明ばかり見ており、クーフリーンの勇姿はモニター越しにスタッフたちが確認していた。特異点修復後は彼に十分な休息を与えようという声も上がったが、彼自身が拒否した。曰く、強敵との戦いに重用されるのは信頼の証で戦士としても喜び、ということらしい。さすがのイケメンで、職員たちから「兄貴」の愛称で呼ばれることになったのは必然だった。

第四特異点は、産業革命期のイギリスであった。街は毒を含んだ霧に覆われており、あちこちにホムンクルスや機械人形など数多くの敵性体が跋扈し、人々は家を出ることができない状況だった。

現地情報を集めている最中、はぐれサーヴァントであるセイバー、モードレッドに出会い、そこから現地で協力関係にあるというジキル博士の家に案内された。そこでカルデアは作家サーヴァント二人と出会ったのだが…

「三流サーヴァント、アンデルセンだ。しがない物書きにすぎんから、

俺を頼りにするのは止めて貰おうか。」

「…先輩…、シヨタです。シヨタですが…」

「うん、わかるよマシユ」

「おい、言いたいことがあるなら言え。まあどうせ、見た目が少年なのになんでこんなふつとい声なんだとか、なんか思ってたのと違うとか、そんなことを考えているのだろう。…全く、お前らのような倒錯的感情の対象になりたくて好きでこの姿なわけではないというのに。あの女もそうだったが、少しは男に夢を持たせるような乙女然とした少女はいないのか。まあ、童貞のくだらん妄想だというのはわかりきったことだがな。」

キャスター、ハンス・クリスチャン・アンデルセン。姿は少年でありながら、達観した考えと見た目と正反対な力強い男の声（c v : 子安）を持つ、見た目詐欺なサーヴァントであった。

「…私の存在がほぼないに等しいですな。一応作家サーヴァント二人に会ったと地の文にあった筈ですが。」

「メタいな。そう思うなら派手に喧嘩でも売ってきたらどうだ、一流劇作家サマ?。」

「いえいえ、私が喧嘩を売ったら一行にも満たない文章で「倒された」と書かれておしまいでしょう。触らぬ神に祟りなしというらしいではありませんか。」

「くそつ。なんでボクはこの姿なんだ。せめてお前みたいに声だけでも大人のとときのだったら違ったのに…!。」

哀れ孔明、新しい犠牲者は増えなかったようだ。微妙な感情を持って余した女達によって、孔明は立香がどこからか取り出したひらひらの服に着替えさせられたのだった。令呪の無駄遣いであったが、それを指摘できるものは居なかった。

その後、絵本サーヴァントを餌付けして可愛がったり霧の中から出てきたマント幼女にちゃんとした服を着せたりしていたら敵の位置がわかり、なんかテンションおかしい雷おじさんと戦ったり、モードレッド曰く「本気で相手を潰すときの乳上」と戦ったりし、なんかラスボスっぽい顔芸と対面して、シヨタを滅ぼしたことをキレた女達に呆れられている隙に逃げたりしたが、まあ蛇足である。

番外編

ばんがいへん 男マスターの場合

数多く存在する平行世界、それだけ数々のカルデアが存在している。マスターが一人だけではなく結構生き残っていたり、テンプレ転生者な心強い仲間がいたり、男サーヴァントしか引けなかったり、逆に女サーヴァントばかり引けたり、王様しか来ないために内部分裂しそうだったり、藤丸立香が淑女（腐）だったり、あらゆる女サーヴァントと関係を持っているフェルグスみたいな藤丸立香だったり…

これは、そんなもしものカルデアの一つの話である。

世界最古の英雄、英雄王ギルガメッシュ。

世界の全てを見通し、世界の全てを集めたといわれるその王の蔵には、文字通り人類の叡智の全ての原典が入っている。

生前のギルガメッシュが集めた数々の宝物はもちろんのこと、ギルガメッシュ自身が集めたわけではないはずの、遙か未来に作られたものですらその蔵には入っており、現在進行形で中身が増え続けているのだ。

その中に、「若返りの霊薬」というものがある。文字通り、飲むと若

返るといふものだが、たいていの場合小学生ほどの子供にまで若返る。(サーヴァントは全盛期の姿で呼ばれるので、大抵は力に満ちた青年や少女の姿、あるいは威厳に満ちた男もしくは女としての最盛期である。そこから若返ると子供に近い年齢になるのかもしれない。)

さて、長々と前置きをしたわけだが端的に状況を述べれば、このカルデアに残った人類唯一のマスター藤丸立香

(男)は、愉悦を欲したギルガメッシュによって若返りの霊薬を盛られたのである。そのため現在の彼は小学校高学年程度の年齢であり、完璧にシヨタであった。(見た目は子供、頭脳は、うわなにするやめ)そんな状態で、もちろんこのカルデアの女たちは黙っていないなかった。

「うふふ、マスター?どこですかあ?急に背丈が縮んでしまって、色々と不便もあるでしょう?母がしっかりとお世話して差し上げますからね?」

「先輩、怖くないですよ。あなたの頼れる後輩が、あらゆる危険から先輩を守りますからね。」

自分と呼ぶ声が聞こえる。

頼れる仲間である彼女たちのその声をきくと出て行ってしまった気持ちもする。

しかし、シヨタを前にするとデンジャラスビースト、またはラフムになってしまうマシユや、息子認定した者にたいしてその狂化EXを全力発揮するキチ母である頼光などに見つかってしまえばどんなことになるか想像に難くない。

霊薬を騙されて飲んだ後、運悪く出くわした清姫は案の定ヤバイ顔をして襲ってきたので、今手元の令呪は二画しかない。たった二画では、彼女たちから逃げられるかどうかわからない。

そもそもサーヴァントは何十といふのだから、三画程度では拘束力としては役者不足である。一斉に何体ものサーヴァントに襲われた

場合、ほとんど機能しない。だからこれまでもダヴィンチちゃんに、令呪のストックをもっとできるように頼んでいたのだが、今となってはどうしようもない。

「マスター、かわいい」

ガシッ

気が付けば物陰に隠れる自分の横には静謐のハサンが立っており、自分の腕をしっかりと掴んで離さない。

「う、うわあああああ！令呪をもつて命ずる！

今、自分は廊下を全力で走っている。ちようど近くにいた金時のバイクを使ってなんとか逃げているが、なぜか彼女たちとの距離は縮まらない。(金時は一緒に乗って逃げてくれようとしたが、一瞬で頼光さんに打ち落とされた。ベアー号が自律走行できなければその時点でゲームオーバーなどころであった。)

先程パラケルススがちらつと見え、それを頼光さんが吹き飛ばしたのを見た。その際にやらかよくわからない容器が割れ、そこから妖しい薬が散布されてしまったようだ。その直後から頼光さんもマシユも頬が紅潮し、凄まじく興奮している。多分ろくでもない薬だったのだろうが、自分もそれを吸ってしまった。何やら体が火照ってきて、少しフラフラする。

令呪を使って足止めを試みたものの、二画程度の令呪では彼女たちの足を止めることはできなかった。それどころか、騒ぎを聞きつけた

ニトクリス、メドウーサ、玉藻の前、槍の方の清姫、酒吞童子など他のサーヴァントも加わり、もはや逃げ切る道は残されていなかった。

気が付けばバイクの後ろの車輪が破壊されており、葉のせいにかまっすぐ立てない。もう駄目かと思われた。

そんなとき、廊下の曲がり角からケイローン先生の姿が見えた。彼はアーチャーとして最高レベルの技量を持っており、神授の智慧によつてユニークスキル以外のほとんどのスキルを使用でき、それを他のサーヴァントにも教えることができ、しかも人格も優れているというまさにパーフェクトなサーヴァント。彼ならもしかしたら！咄嗟に声が出る。

「先生！助けて！」

こちらを見て、その後ろにいるサーヴァント達の顔を見てほしい悟ったのか、すぐに自分を抱え、すぐ近くの

空き部屋に逃げ込んだ。するとなぜか彼女たちは部屋の前をそのまま通りすぎてしまった。

「興奮している彼女らでは、簡単な暗示や目の前に見える幻覚などに対応できないでしょう。しばらくはここでどうにかかります。」

「ありがとう。助かった。」

やはり先生は頼りになるということを確認した。今のうちにどうにか対策を考えなければならぬ。

ふと、ケイローン先生がなかなか自分を離さないことが気になった。彼女たちからはなんとか逃げられたのだし、そろそろそのベツドにでも降ろしてほしいと伝えた。

「…貴方は、少し軽率でしたね。今の貴方はかなり危うい。」

何やら雲行きが妖しい。なにやら今更危機感が募ってきた。

「賢者で通っている私ですが、これほどの、妖しい魅力を持つ美少年を前にしては…」

え、ちよ、やめ、あ、…

ア
ー
ー
ー
ツ